

## 9 図書館及び図書等の資料、学術情報

### 1 図書、図書館の整備

#### 1) 図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性

##### [現状の説明]

##### (1) 図書

本学図書館には、開学以来、周到な準備のもとに集められた各学科関連の基礎資料がそろっているが、なかでもスペイン語の資料の充実ぶりが際だっている。

平成 15 年 5 月末現在、蔵書数は約 26 万冊、うち、和書 58%、洋書 42% である。大学の設立母体がスペインに本部をもつ聖心侍女修道会であるため、全洋書に占めるスペイン語図書の割合が 40% と高いことが、本学図書館の大きな特色となっている。スペイン語資料に関しては、学術研究書以外にも、児童図書や最近の文学作品、趣味の本や軽い読み物など、幅広い収集を行っている。近年は同じスペイン語圏でも、ラテンアメリカ関係資料の収集にも力を入れている。

カタラン語、ガリシア語、バスク語、ポルトガル語などの文献も、スペイン文学研究の便宜上、スペイン語図書のフロアに配架している。

平成 5 年の大学院開設時には、言語学系と哲学・神学系の資料を、洋書を主として重点的に整備した。また、平成 13 年度の地球市民学科の設置にあわせて、12 年度から年次計画を立てて当学科に関わる分野の資料を収集している。

特殊コレクションとしては、ウォレス・ハドリル教授旧蔵書「ヨーロッパ中世史文献コレクション」、高

橋正治教授旧蔵書「高橋文庫」（「大和物語」の写本など平安文学研究のための基本文献コレクション）を所蔵している。

量的整備としてはこの 10 年間を平均して、年間に約 8,000 冊を受け入れている。

また、ほぼ毎年文部科学省に研究設備整備費等補助金の申請を行い、交付を受けて基礎資料の充実をはかっている。これらのデータはすべて国立情報学研究所または OCLC に登録し、OPAC を通じて国内外に公開している。

##### (2) 雑誌

所蔵雑誌数約 3,200 誌、年間受入数約 1,160 誌は、図書と同様、文学、思想分野が多くを占めていたが、大学院設置を機に言語学と思想関係、また地球市民学科設置を機に社会学関係の雑誌の充実がはかられている。

##### (3) 視聴覚資料

所蔵する視聴覚資料は約 13,000 タイトルで、マイクロ資料はマイクロ資料室で、ビデオ、CD、カセットテープなどは AV ライブラリーで利用できる。

マイクロ資料はフィルム、フィッシュ合わせて約 5,000 タイトルを所蔵している。視聴覚資料もスペイン、ラテンアメリカ関係の資料が充実している。分野としては約 40% が文学、30% が語学である。AV ライブラリーでは、BBC や CNN 等の衛星放送を視聴することができ、語学習得に活用されている。

##### (4) 電子出版物、その他

所蔵する電子出版物は平成 15 年 5 月 1 日現在 295 タイトルで、これには CD-ROM、DVD-ROM、フロッピーディスク、電子ブックが含まれる。

CD-ROM 等は二次資料、辞・事典類、外国新聞等を中心に積極的に収集し、CD-ROM サーバを導入してネットワーク化を進めてきた。圧倒的にスペイン語など外国語の CD-ROM の受入れが多いため、英語版

Windows 環境の整ったパソコンを設置し、利用者の便宜をはかっている。

ほかに、ホームページからアクセスできる各種の有料データベース・電子ジャーナルは、平成 15 年 5 月 1 日現在 14 件を利用に供している。(別紙リスト参照)

#### (5) 選書体制

蔵書の構成を決めているのは主に教員で、各学科・課程ごとに教育・研究上必要と思われる専門的資料を選書する。図書館には各学科の図書費予算とは別に独自に使える予算があり、一般教養書、参考図書、書誌類などを選書している。

また、毎月開催される図書委員会(図書館長を委員長とし、各学科・課程教員から構成される)において、1 点が 10 万円以上で、各学科に共通して使える資料を選定している。

### [点検と評価]

平成 14 年度において、図書館予算が削減され、それにより「図書費」、「雑誌・消耗品的資料費」、「データベース使用料」を合わせた資料費の合計が 8 千万円となった。15 年度は同額を維持したが、量より質へ転換をはかる時期にきているといえる。

従来、洋書の比率が高い蔵書構成であったが、これら洋書の専門書は、学内外の研究者はともかく、学生の利用は少ないのが現状である。学部学生のレベルにあった、より教育効果の見込まれる資料の収集にも力を入れるべきであろう。しかし一方で、本学の特色であるスペイン語圏の資料の充実に、なお一層努める必要がある。

学術雑誌の所蔵数、受入数ともに充実しているとは言いがたいが、洋雑誌の価格高騰にともない、さらに購読を中止せざるを得ないものがあるのが現状である。今後、図書、雑誌とも「継続資料」の見直しを行い、質的な整備を進める必要がある。

視聴覚資料は文化を多面的にとらえる観点から、教材として有効なので、今後も収集に力を入れる方針である。

また、マイクロ資料は「保存性」の面で、電子媒体は「検索性」の面ですぐれており、機能を明確に意識して収集する必要がある。

オンライン・データベースは、効率的な情報収集には欠かせないメディアであり、今後よりいっそうの充実に努めたいが、海外データベースは契約料が高価である場合が多い。利用頻度を把握し、毎年契約を見直していく必要がある。

### [改善の方策、将来への展望]

本学の学科構成を考慮すると、図書費の削減には限界がある。情報検索ツールとして欠かせないオンライン・データベースは年々増加していかねばならないし、利用者が増えるにしたがって、1 つのデータベースに対する契約アクセス数も増やしていく必要も出てくる。この費用を捻出するためには、別の資料費を削減しなければならない。そこで、まず考えられるのが、長年利用されていない雑誌の購読継続の見直しであろう。

今後も購読継続するかどうか、全雑誌を対象に見直しを行い、必要性の少ない雑誌については、大胆な購読中止に踏み切ることが急務である。ただし、本学の蔵書構成の特色であるスペイン語の新聞・雑誌に関しては、学術雑誌・一般誌を問わず、購入継続と永久保存をしていく方針である。

図書についても、長期にわたり継続購入しているシリーズの継続購入見直しを行うべきである。

今後、書庫の収容能力の点から早急に検討しなければならないのは、雑誌の保存年限及び、紀要受入の見直しである。国立情報学研究所の研究紀要電子化計画が軌道にのれば、紀要の受入は漸次中止へ向かうであろう。

毎年、利用頻度の少ない資料を一定量廃棄することも必要である。電子媒体にとって代わる資料と、冊子体で残す資料の基準を明確にして、資料全体の軽量化をはかるべきである。

バランスのとれた蔵書構成は理想的であるが、単独で実現することはむずかしい。この問題を補うためには、他機関との相互協力を推進する必要がある。公共図書館とのネットワークによって一般教養的資料の不足を補い、他大学とのネットワークによって分担収集を実現し、資料費抑制をはかるなど、今後は、一館で解決できないことについては、コンソーシアムを立ち上げるなど、図書館相互の協力により、解決の道をさぐっていく必要がある。

#### 2)-1 図書館施設の規模の適切性、有効性

#### [現状の説明]

現在の図書館は鉄筋コンクリート造り、地下 2 階、地上 2 階の 4 階建てで、延べ床面積 2,383 m<sup>2</sup>の独立した建物である。平成 3 年 10 月に竣工、開館した。1 号館 1 階の一部と地下の 2 層の書庫(740 m<sup>2</sup>)、4 号館 2 階の一室が当てられている AV ライブラリー(74 m<sup>2</sup>)を合わせると、図書館専有延べ床面積は合計 3,197 m<sup>2</sup>

となる。

用途別内訳は以下の通りである。

閲覧スペース（開架）	1,537 m <sup>2</sup>
書庫スペース（開架）	719 m <sup>2</sup>
視聴覚スペース	93 m <sup>2</sup>
事務スペース	165 m <sup>2</sup>
その他のスペース	683 m <sup>2</sup>

蔵書収容能力は、当初 28 万冊、移動書架を最大限に設置した場合、35 万冊である。ただし、開架書庫で運用しているため、移動書架の増設には限界があり、実際にはかならずしも 35 万冊の収容は望めない。

図書館には、開架閲覧室、開架書庫、閉架書庫、マイクロ資料室、貴重書書庫、グループ学習室、特別閲覧室、AV ライブラリー、館長室、情報管理室、製本準備室、荷解室、事務室、参考図書コーナー、目録検索コーナー、新聞・雑誌コーナーなどがある。

平成 13 年に 1 号館の耐震工事が行われ、地下書庫の耐震性が向上した。

### [点検と評価]

図書館の閲覧席は、明るく快適な学習環境を提供しており、学生によく利用されている。また数名のグループで利用できるグループ学習室は、演習発表準備などのために、利用頻度が高い。

AV ライブラリーも、語学自習、映画鑑賞のため大変よく利用されている。ただ、図書館とは離れた 4 号館にあるため、管理・運営上、また利用者上の不便がある。収納スペースが不足してきているのも問題である。また、人員配置の問題により、開室日、開室時間ともに図書館より制限されている。

現在図書館でかかえる最大の問題は、蔵書の収容能力である。将来の蔵書数の増大に備えて、図書館の地下二層は、当初から移動書架を設置し、毎年数台ずつ増設してきた。しかし、資料の約 85%を開架で運用している現状では、移動書架の本数を最大限まで増やすことには限界がある。今後、図書の増加にともない、配架スペースの確保がむずかしくなることが予想される。

### [改善の方策、将来への展望]

AV ライブラリーの開室時間延長は、将来、人員配置の問題を解決することで解決することも可能だが、抜本的には AV ライブラリーを図書館組織から切り離して CALL 自習室等と統合し、メディアセンター的な組織として、再編する方向で考えていくべきであろう。これについては、全学的な問題として検討する必要がある。

ある。

蔵書収容能力の問題を解決するには、保存書庫の増設が望ましいが、キャンパスのスペースや財政面を考えると、その実現は難しく、不要な資料の廃棄、利用頻度の低い資料の保管委託などを進めることが現実的である。

将来、1 号館を建替える際、現在 1 号館地下書庫に収蔵されている約 10 万冊の洋書・洋雑誌の移動先が問題となる。図書館内に組み入れるスペースはない。また、1 号館地下書庫内に 34 席ある閲覧座席も図書館内に確保することは不可能である。これらの問題を解決するために考えられることのひとつは、図書館 B2 にある大学全体の書類保存書庫を、1 号館建替えの際に、図書館スペースとして使用できるようにすることである。10 万冊までの収容は望めないが、鍵のかかる保存書庫は、閉架書架として活用することができる。

このように、大学施設の新・改築の際には、図書館の蔵書スペースについても念頭に置き、建築計画を立てていく必要がある。

## 2)-2 機器・備品の整備状況とその適切性、有効性

### [現状の説明]

利用者用として情報検索端末 12 台、OPAC 専用端末 1 台、CD-ROM 検索専用端末 2 台、プリンタ 3 台を設置、コピー機はカラー・コピー機 1 台、白黒コピー機 2 台、その他マイクロリーダー・プリンタ 1 台、ビデオデッキ 1 台を図書館に設置している。

AV ライブラリーには、情報検索端末 1 台、プリンタ 1 台、大型モニター 2 台、ビデオデッキ 14 台、カセットテープ・デッキ 3 台、CD プレーヤー 2 台、LD プレーヤー 2 台、DVD プレーヤー 3 台、レコードプレーヤー 1 台、スライド・プロジェクター 1 台がある。

また、BBC や CNN 等の衛星放送を受信できる機器を備えるとともに、2 つのブースにクローズド・キャプション・デコーダーを設置して、語学の学習に役立っている。ヨーロッパの PAL 方式のビデオを VHS 方式に変換するためのデジタル・スキャン・コンバーターを 1 台設置し、授業でビデオを使用する際の便宜をはかっている。

図書館は、開館当初に設置した無断持出し防止装置に加えて、平成 12 年度に入館システムを導入し、磁気テープ付きの図書館利用カードで入館できるようになった。これにより、正確な入館者統計がとれるようになった。さらに、14 年度からは、学生証と図書館利用

カードを統合し、学生証により入館、貸出を行えるようになった。

### [点検と評価]

図書館の情報システムが平成 14 年 4 月から学内 LAN に接続され、利用者は各自のパスワードにより、LAN にログオンし、インターネットを通じて図書館 OPAC を利用するようになったことで、たいへん使いやすくなったといえる。また、学外利用者や生涯学習講座の受講生のためには、図書館員がセキュリティ上の配慮を施したユーザー・パスワードによりパソコンを立ち上げて、OPAC 検索できるようにしたことも好評である。

### [改善の方策]

利用者から、検索端末の台数を増やすよう要望が出ているが、スペースの関係でこれ以上の設置が難しいため、無線 LAN 環境を設定し、各自が持ち込みのパソコンで検索できる方法を検討していく必要がある。

3) 学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性

### 学生閲覧室の座席数、開館時間

### [現状の説明]

閲覧スペースの座席数は 206 席で、全学生数の 1 割強である。内訳は図書館 158 席、1 号館開架書庫 34 席、AV ライブラリー 14 席である。

開館時間は

通常	月～金：	8:50～20:00
	土：	8:50～17:00
授業・試験のない期間	月～金：	9:00～17:00
	土：	9:00～13:00
夏期休暇中	月～金：	9:00～16:00

平成 12 年度から大幅な開館時間の延長を行った。平成 14 年度の年開館日数は 260 日、時間外開館時間は 828.5 時間となっており、いずれも私立大学の平均を上まわっている。(文部科学省「平成 14 年度大学図書館実態調査結果報告」参照)

### [点検と評価]

利用者からは座席数増設の要望が出ているが、ス

ペースがなく、対応に苦慮している。

開館時間を 20 時までとしたことは、利用者にたいへん好評を得ている。

休日開館を希望する声も出ているが、これは図書館だけでなく他部署の勤務体制にも影響するので、学内のコンセンサスを得るのに時間がかかると思われる。今後の検討課題である。

### [改善の方策]

座席数確保の問題は、現在一部の教員の希望により残しているカード目録を撤去して、キャレルデスクを配置するなどの対応を考えなければならないだろう。

### 図書館ネットワークの整備状況

### [現状の説明]

平成 11 年度に CD-ROM サーバが導入され、平成 13 年度から学部 3 学科と大学院の研究室と図書館目録コーナーの LAN 接続端末から 24 時間 CD-ROM の利用が可能となった。しかしながら、各 CD-ROM のタイトルごとにクライアント機の設定が必要になるなど、メンテナンスが館員の大きな負担となってきた。

ネットワークで利用できる CD-ROM のタイトルは 10 件で、164 タイトルの CD-ROM の中から、百科事典、書誌類、英字新聞、語学・文学関係の代表的なものが選ばれた。

しかし、導入した CD-ROM サーバの HTTP サーバソフトはネットワーク・セキュリティ上の安全性に問題があるため、学内の方針で平成 15 年 5 月 1 日現在、運用を中止している。

### [点検と評価]

運用を中止する以前から、CD-ROM サーバが十分に活用されていたとはいいがたい。多くの端末から CD-ROM データベースを検索できるようにするためには、その台数分に応じた使用料金を支払わなければならないため、学内でアクセスできる端末設定台数を多くできなかったことも、中止にいたった要因のひとつであろう。

また、メンテナンスの面においてもパソコンの OS ヴァージョンアップや、CD-ROM の更新のたびに、サーバだけではなく、全端末を設定し直さなくてはならず、館員が技術的にも時間的にも、十分な対応ができなかったことにも原因がある。

## [改善の方策]

現在では、CD-ROM データベースから、パソコンの環境に影響を受けない Online データベースに徐々に切り替えているが、今後もこれを推し進めることになる。

### 図書館利用に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性

## [現状の説明]

### (1) 新入生ガイダンス

図書館新入生ガイダンスは、入学時の新入生週間に組みこむ形で、全新生を対象に行われる。概要は次の通りである。

①WebOPAC と基本的データベースの使い方の解説  
情報環境センターが主催する新入生ガイダンスにおいて、WebOPAC と基本的なデータベースの使い方を新入生全員に講堂で大型スクリーンの画面を見せながら解説する。

②図書館ツアー  
学科ごとに、数人ずつのグループに分け、図書館内を連れて歩き、図書館施設を案内し、貸出・返却方法などを説明する。今年度は、上級生による新入生ツアーを実施した。このことについては、のちに述べる。

### (2) 各ゼミ単位情報検索ガイダンス

授業のひとつま(1.5時間)を利用し、各ゼミの分野に沿った情報検索ガイダンスを実施している。4~5名を1グループとし、全員が実際にパソコンを操作し、検索できるように配慮している。ガイダンスを受講した学生から、メールによる意見聴取を行っているが、大変評判がよく、図書館利用の促進に役立っている。教員からの申し込みにより実施しているが、利用する教員は、毎年増加している。ガイダンスの概要は次の通りである。

①図書資料の探し方  
自館 OPAC の検索と本の所在の説明。他機関 OPAC 検索方法(国立国会図書館、都立図書館、Nacsis-webcat、など)

②雑誌論文の探し方  
国立国会図書館雑誌記事索引、雑誌所蔵情報の調べ方(自館 OPAC、Nacsis-webcat、など)

③各種データベース、サイトの検索方法  
新聞記事データベース、総合辞書データベース、各ゼミの分野にふさわしいデータベースやサイトの紹介

④分野ごとの文献リスト配布  
各ゼミの分野で活用すべき自館所蔵の文献のリストを作成、配布。

## [点検と評価]

### (1) 学生による情報検索サポート

先に述べたように今年度(平成15年)は、新入生ガイダンスを上級生や卒業生によって行った。学生の視点を活かした図書館利用ガイダンスは、新入生から積極的な質問が寄せられるなど、大変好評だった。年齢が近いこともあり、積極的に質問する姿も見うけられた。これを契機に15年度後期から、図書館目録検索コーナーに学生による情報検索ヘルプスタッフを配置することとなった。

### (2) 指定図書制度

指定図書は、課題作成など、授業で直接関連して学生が必読すべきものとして、教員が指定した図書を別置き、学生の利用に供するものである。指定図書は、原則として1科目3冊以内としているが(複本可)、教員の希望があれば、特に制限を設けていない。期間は、半期、全期を選択する。教員からの希望により短期間の指定も受けつける。指定図書が図書館に所蔵していない場合は、至急そろえるようにしている。毎年、年度初めに教員全員に指定図書についての案内をしているが、授業開始と同時に備えておくためには、もっと早期に案内をする必要があると思われる。

### (3) 学外者への図書館サービス

本学図書館では、下記の通り、学外者への図書館サービスを実施している。

①卒業生：本学学部学生と同条件で利用可  
②本学の生涯学習講座(ラファエラ・アカデミア)受講生・日本カトリック大学連盟加盟大学(「項目8他大学等との協力の状況について」参照)の教職員及び学生・他大学等研究機関の教職員及び学生：閲覧のみの場合は無料とし、貸出を希望する場合には(2冊2週間)年間使用料3,000円を徴収している。生涯学習講座のある土曜日は、利用者が多く、女子大の図書館であることを感じさせないほど、生涯学習講座受講生に活発に利用されている。また、他大学大学院生なども本学資料を活用している。

### (4) 広報—ホームページ、その他—

自館 OPAC、各種データベース、電子ジャーナルなどは、すべて図書館ホームページからアクセスできるようにしている。また、開館日程、利用方法、貴重書紹介などもホームページ上で行っており、いわば情報検索のプラットホームと広報の役割を果たしている。

今後は、ホームページで図書館利用教育ができるような構成を考えて利用者の便宜を図っていききたい。また、所蔵する古文書をテキスト化して公開するなど、積極的な情報発信の場として、より一層充実していききたい。

#### (5) 効率的な学生支援体制

急激な資料の多様化にともない、利用教育も図書の利用方法だけではなく、データベースや CD-ROM の利用方法の解説など、多面的に行なえるようになってきた。利用教育を充実させるためには、情報検索技術における館員のスキルアップや人員の確保が必須であるが、現状では人員削減に伴い利用教育に十分な人員が確保できていない状況にある。また、教学との連携も十分とはいえ、効率的な学生支援体制が整えられていない。しかし、そのような状況の中で、図書館員のメーリングリストを活用し、新規導入データベースの情報などは、全員で情報を共有するようにしている。

#### (6) 情報検索ガイダンス

図書館にとって、情報インフラの整備とともに、資料の有効利用を促進するための利用教育は、最も力を注がなければいけない業務のひとつである。現在、教員に積極的に働きかけ、少しでも多くの学生に情報検索ガイダンスを実施するようにしているが、それでも、一部の学生へのガイダンスに留まっている。ガイダンスを受講した学生とそうではない学生の情報検索における技術格差は、かなり大きい。このような格差を解消するためには、全学的なカリキュラムとして図書館利用教育を組みこむなど、全学生が情報検索方法を身につけることができるような方策が必要になってくるのではないだろうか。

### [改善の方策]

#### (1) 学生による情報検索サポート

学生ヘルプスタッフを図書館目録検索コーナーに配置することにより、学生同士で気軽に質問できる雰囲気を作ろうとする試みである。スタッフは、司書課程を受講している上級生と大学院生により、構成される予定である。このような取り組みを通じて、学生の情報検索能力の底上げをしていくことができれば、図書館利用を促進することができると考えられる。

#### (2) 指定図書制度

指定図書制度の運用により、学生の図書館利用を促進し、図書館による授業支援を充実していく。将来的にシラバスが Web 上に公開されれば、各教科の参考図書リストと図書館 OPAC を連動させる、ということも検討する。

#### (3) 学外者への図書館サービス

今後も資料を有効活用するために、より積極的に学外者にサービスしていく。

#### (4) 広報 —ホームページ、その他—

ホームページは、16 年度には全面改訂を行い、Web 上で図書館利用教育ができるコンテンツを作成したいと考えている。また、図書館利用案内については、現在、図書館システムを新しいシステムへ移行中のため、移行完了後、平成 16 年度には全面改訂版を作成する予定である。

#### (5) 効率的な学生支援体制

教員の協力のもとに積極的に授業に関する情報を収集し、図書館として、課題を直接サポートできる学生支援体制を整える。

#### (6) 情報検索ガイダンス

充実した学生生活を送るため、そして生涯に渡って役立つ情報検索能力を身につけさせるために、図書館利用教育は、ますます充実していかなければならない。そのためには、学生ヘルプスタッフの意見聴取を行うなど、積極的に学生の意見を取り入れ、利用者の視点に立った利用教育を実施していくことが重要であると考えられる。

## 2 学術情報へのアクセス

### 1)-1 学術情報の処理・提供システムの整備状況

#### [現状の説明]

#### (1) 図書館情報システム図書館業務電算化の歩み

以下の通りである。

平成 5 年 4 月	IBM の図書館情報システム CLIS/400-U 導入決定
平成 5 年 8 月	AS/400 機器搬入学術情報センターと INS-P で接続
平成 6 年 3 月	学術情報センター業務モードでデータ入力開始
平成 6 年 4 月	発注・受入システム、目録システム、雑誌管理システム、AV 資料管理システム本稼働
平成 7 年 3 月	和書遡及入力完了
平成 7 年 4 月	OPAC 本稼働
平成 7 年 8 月	図書館内にイーサネットを敷設、館内 LAN 整備
平成 7 年 9 月	利用者端末 4 台増設、貸出用、参

考業務用端末各 1 台設置。

平成 8 年 3 月 洋書、雑誌遡及入力完了

平成 8 年 4 月 貸出・返却システム本稼働

平成 8 年 9 月 背ラベル打出しシステム本稼働利用者端末 3 台増設

平成 9 年 6 月 参考業務でインターネット利用開始（プロバイダー接続）

平成 9 年 8 月 蔵書点検システム本稼働。学内 LAN 用館内配線工事完了、SW ハブを図書館事務室内に設置

平成 10 年 3 月 AV 資料の遡及入力完了

平成 10 年 4 月 学内 LAN 本稼働

平成 10 年 7 月 事務用端末、利用者用端末各 1 台を学内 LAN に接続、インターネット利用可能となる

平成 10 年 8 月 サーバを AS/400 モデル S20 にバージョンアップ、データ移行完了 AS/400 を学内 LAN に接続

平成 10 年 10 月 利用者にインターネット端末を開放

平成 10 年 12 月 図書館ホームページ開設。Web OPAC 運用開始、学内 LAN 接続パソコンから OPAC 検索可能となる

平成 11 年 10 月 2000 年問題対応

平成 12 年 2 月 NSCDNet 搬入、CD-ROM のネットワーク利用開始

平成 12 年 4 月 入館システム本稼働。次期図書館システム検討開始

平成 13 年 5 月 MBA の図書館システム INGENIO 導入決定

平成 13 年 10 月 貴重書「大和物語」を電子化、ホームページ上で公開

平成 14 年 2 月 DELL POWER EDGE 2500 機器搬入

平成 14 年 4 月 INGENIO 本稼働。国立情報学研究所の新 CAT/ILL 利用開始

平成 14 年 7 月 INGENIO 稼働停止、旧システムへの復帰を決定

平成 14 年 8 月 CLIS/400-U システム稼働再開。次期システムの検討開始

平成 14 年 11 月 リコーの図書館システム LIMEDIO 導入決定

平成 14 年 12 月～ データ移行仕様検討

平成 15 年 6 月 機器搬入・設定。LIMEDIO 図書館員利用教育移行データ検証

平成 15 年 9 月 リコーの LIMEDIO 本稼働予定。

## (2) 国立情報学研究所

平成 5 年に国立情報学研究所（当時は学術情報センター）に接続して以来、NACSIS-CAT を使って目録データの処理を行ってきた。スペイン語資料の受け入れが多いため、図書、雑誌ともに新規データを作成することが多い。国の総合目録データベース構築に協力し、学内外の研究者に情報提供することが社会貢献のひとつと考え、館員は新規データの作成を積極的に行っている。

## (3) WINE、OCLC

電算化以前の目録情報については、早稲田大学の WINE と米国の OCLC を使って業務委託により MARC 化処理を行った。電算化後も、館内で処理しきれない洋書については、OCLC を使って目録データを処理してきた。そのため、洋書約 7 万件のデータが OCLC に登録されており、北米からの照会も多い。

## (4) OPAC と外部データベース

学術情報の提供はすべて図書館ホームページ上で行っている。ホームページから、自館の OPAC はもちろん、他大学、他機関の OPAC や各種データベースにアクセスできる。自館蔵書の目録情報は OPAC でリアルタイムに学内外に公開されている。（有料の書誌データベース・電子ジャーナルについては、別紙リスト参照。）

## [点検と評価]

平成 5 年に導入した CLIS400-U システムは基本的に必要な機能はすべて備えているが、細部については当館の事情に対応していなかったため、毎年カスタマイズをしてきた。平成 14 年度から国立情報学研究所の新 CAT/ILL に対応できるシステムとして MBA 社の INGENIO を導入したが、システム上の不具合が多く改善の見込みがないため、同年 7 月に運用中止を決定、一旦旧システムに復帰した上で、改めて次期システムの検討に入った。閲覧システムと OPAC は稼働していたので、利用者の不便は最小限に抑えることができた。システム選定の失敗は、業者の経験不足による、予期しないトラブルが続いたことが最大の原因であった。その後、再度、各大学図書館システムを見学し、比較検討の結果、平成 14 年 11 月にリコーの LIMEDIO 導入を決定、平成 15 年 9 月本稼働をめざしている。

従来の図書館システム CLIS400-U にはユーザー会のような導入館のネットワークがないため、他の導入館と意見交換する場がなく個別にカスタマイズするしかなかったが、LIMEDIO は導入館が多く、ユーザー会が各大学図書館の意見を集約して、標準仕様に盛り

込む体制を整えているので、システムとしての発展性が見込まれる。また、従来のシステムと違い、認証管理により利用者が自分で貸出状況を確認する、予約をつける、などの機能が整っているため、いわばインタラクティブな環境を整えることができ、利用者サービスが向上することはまちがいない。

外部データベースや電子ジャーナルについては、この数年間で飛躍的に導入件数が増加したが、高額なため整備に限界がある。しかしながら、大学図書館として教育・研究基盤を整備するためには、今後ますますデータベースや電子ジャーナルを導入していく必要があり、その方策を検討しなければならない。これは全国的な問題であり、国や大学図書館界全体でその対策を講じ始めている。

### [改善の方策]

LIMEDIO に関しては、将来的には、各種データベースと自館 OPAC さらに所蔵確認データベースを連動し、文献入手が Web 上で、ワンストップで行えるサービスを展開していきたい。

また、データベースや電子ジャーナルに関しては、今後は、文部科学省への補助金申請、私立大学図書館協会の電子ジャーナルコンソーシアム（現在計画中）への参加など、各界の動きを追い、経費を抑える施策を考えつつ、整備することを検討する。

## 1)-2 国内外の他大学等との協力の状況

### [現状の説明]

#### (1) ILL

平成 14 年度より国立情報学研究所の NACSIS-ILL に参加している。それまでは主に FAX による依頼・受付であったが、NACSIS-ILL になって、処理スピードもアップし、取り扱い件数も増加している。従来、文献複写は依頼件数が受付件数を大きく上まわっていたが、NACSIS-ILL になってからは、受付件数のほうが上まわるようになった。海外への依頼については、OCLC-ILL システムを導入しており、NACSIS-ILL と同様、Web 上で依頼できるので、迅速に文献を入手できる環境が整ったといえる。

#### (2) 相互利用—日本カトリック大学連盟図書館協議会、その他

日本カトリック大学連盟図書館協議会に加盟している 17 のカトリック大学図書館との間には、相互利用協定があり、互いの図書館を学生証だけで利用すること

ができる。東京近郊ということもあり、聖心女子大、白百合女子大、上智大学等との間で相互利用が盛んである。本学図書館で提供できるサービスは閲覧と複写に限られていたが、平成 15 年 2 月に「図書館利用規程」が整えられ、平成 15 年 4 月から、他大学の学生にも貸出を行うようになった。

協定校以外でも、所属の研究機関か公共図書館の紹介状を持参すれば、利用を認めているので、東大、慶応など近隣の大学をはじめとして、関西や北海道などからも、特殊な資料を閲覧するために学生や研究者が訪れることもしばしばである。反対に、本学学生や教員が他大学等を利用するために紹介状を発行する件数も増えている。これは、各大学がインターネットに OPAC を公開し、資料の所蔵を Web 上で確認できるようになったことが大きな要因であると思われる。

#### (3) 相互利用—品川区立図書館

平成 15 年 4 月より、本学図書館は、品川区立図書館との間に相互利用のネットワークを立ち上げた。1 年間は試験運用期間とし、まず、資料貸借を巡回車を使って行うサービスから開始することになった。各自自治体が地域の大学との連携を強めている中で、本学と品川区も協力して区民と本学構成員の学習・研究を支援しようというものである。資料の貸出・返却は、週一回、品川区図書館の巡回車を通じて行っている。ただし、学外者への資料の貸出については、本学の学生・教職員を優先させるため、試験期や夏休み中の取扱い、貸出対象資料などにいくつか制限を設けている。

### [点検と評価]

品川区立図書館との相互利用は、学術書や専門書を主体に 25 万冊を所蔵する大学図書館と、あらゆる分野の一般書を主体に 10 館で合わせて 96 万冊を擁する品川区立図書館が協力することにより、「専門書が多く、小説類が少ない」という本学学生の声に応えるものとして評価される。また、図書費予算削減傾向の中で選書方針の違う図書館同士が協力しあえることは、本学にとって大きな意義がある。

このサービスは、利用者が区立図書館の資料を本学図書館カウンターで貸出・返却ができるので、好評を得ている。現在は、本学の学生が区立図書館の資料を利用する割合が高いが、品川区民にとっても、区立図書館に所蔵していない学術書などを本学図書館から貸出ができるので、今後利用の増加が見込まれる。このサービスは緒についたばかりで、今のところ特に問題点は見当たらないが、利用の増加にしたがって、延滞や紛失、巡回車の来校回数などの問題が生じることも

予想される。また、広報を通じて区民の本学図書館利用の促進をはかる必要がある。

### [今後の方向]

本学は女子大学であるため、学生の安全確保の面から図書館を全面的に市民に開放することへの懸念があり、当面は巡回車による相互貸借サービスにとどめることになっている。しかし、ともかくもこのネットワークにより、本学図書館が所蔵する資料を社会に提供

し、地域社会への貢献がなされることに意義があり、また、本学学生も利益を得ているので、今後もこの協力事業を、双方にとってメリットのある事業として推進していくことが望ましい。将来的には、品川区立図書館との相互利用ネットワークに、他大学図書館も加わり、より機能的なネットワークに発展する方向も検討したい。参加館相互の OPAC 横断検索を実現するなど、活発な相互利用を模索していく。

表 9-1 図書館接続有料データベース（以下 DB）リスト

DB 名	契約開始年月	契約先	DB 内容	使用形態
OCLC First Search	1998.3～	OCLC (代理店: 紀伊国屋書店)	世界最大のレファレンスサービスデータベース	全学より検索可
Nacsis IR	1995.8～	国立情報学研究所	書誌情報・研究者情報・学術情報 DB 等	図書館員による代行検索
Nacsis IR 機関利用	2002.4～	国立情報学研究所	書誌情報・研究者情報・学術情報 DB 等	全学より検索可
日経テレコン 21	2000.4～	日経メディアマーケティング	新聞記事・企業・人事情報等	図書館員による代行検索
Digital News Archives (朝日新聞記事全文データベース)	2001.4～	朝日新聞社 (代理店: 紀伊国屋書店)	朝日新聞、AERA 記事情報 (1985～)	全学より検索可
BOOKPLUS	2001.5～	日外アソシエーツ (代理店: 紀伊国屋書店)	書籍情報 (昭和元年より)	全学より検索可
MAGAZINEPLUS	2001.5～	日外アソシエーツ (代理店: 紀伊国屋書店)	国会図書館雑誌記事索引、一般誌記事索引など	全学より検索可
Literary Resource Center (MLA を含む)	2002.10～	Gale 社 (代理店: 丸善)	作家情報データベース・全年代にわたる 120,000 人以上の小説家、詩人、エッセイスト、ジャーナリストについての人物情報、書誌情報、評論	全学より検索可
Japanknowledge	2002.11～	ネットアドバンス	各種事典、マルチメディア用語、現代用語やインターネット上のリソースなどを一括して検索することができる膨大な知識データベース	全学より検索可
Oxford English Dictionary	2003.1～	Oxford Univ. Press (代理店: 丸善)	英語歴史関係辞書の DB	全学より検索可
IESBS Online	2003.1～	Elsevier Science (代理店: 丸善)	社会科学・行動科学 国際百科事典のオンライン版	全学より検索可
大宅壮一文庫	2003.4～	紀伊国屋書店	大宅壮一文庫で収集した雑誌記事索引	全学より検索可
Science Direct (電子ジャーナル)	2003.6～	Elsevier Science	エルゼビア・サイエンス社発行の幅広い分野の雑誌をインターネット上で閲覧できる。	全学より検索可
LLBA	2003.6～	Silver Platter (代理店: 丸善)	言語学・語学・言語障害医療など幅広い分野にわたる抄録を含む書誌情報 the LLBA Thesaurus 収録	全学より検索可

※1 Science Direct 全文閲覧可能洋雑誌全 7 誌

- ①Women's studies int.forum ②Cognitive Science ③Cognitive Psychology ④Journal of memory and language  
⑤ Lingua ⑥Journal of pragmatics ⑦Language and communication with language science

## 「9 図書館及び図書等の資料、学術情報」の総括

これまでの諸項目で述べてきたように、図書館の施設、備品機器、あるいはデータベースやネットワーク関連、利用者サービスなどで、改善していかなければならない点がいくつかある。短期のうちに改善できる事柄もあれば、何年か努力を重ねることで徐々に実現にこぎつけられるものもある。つぎに列挙するのは、これからの3年間、つまり平成16年度から18年度にかけての、実質的な改善のための到達目標である。

### 平成16年度終了までに:

- ① 利用者が気軽に質問できるヘルプスタッフの配置時間を延長する。
- ② ホームページを全面的に改訂し、いっそう使いやすくして便利なものにする。その際、Web上で図書館利用教育ができるコンテンツも作成する。
- ③ 教員と連絡をとりながら授業の理解に役立つ指定図書コーナーを充実したものにしていく。タイトル数は昨年度の2割増をめざし、来年度以降もその上昇傾向の維持につとめる。
- ④ 利用者が館内にパソコンを持ち込んで、OPAC検索やその他の作業ができるように無線LANの環境を整備する。

### 平成17年度終了までに:

- ① 現在図書館の管理下にある多様な視聴覚メディアが、さらに効率的に利用されるように、組織の改編に合わせてAVライブラリーを図書館から切り離す。
- ② 各種データベースと自館OPACさらに、所蔵確認データベースを連動し、文献入手が迅速に行えるシステムを構築する。
- ③ 過去10年の紀要論文の著作権をクリアし、ネット上での公開をめざす。

### 平成18年度終了までに:

- ① それぞれの分野の専門家の協力を得ながら、全雑誌の利用状況を点検し、購読中止やオンライン化を模索しながら資料全体の軽量化をはかる。1割削減をめざす。
- ② 15年度にスタートした品川区立図書館との相互利用のネットワークが、双方にとって有益なものになるように基盤をしっかりと構築し、近隣の他大学図書館に対しても参加をはたらきかける。
- ③ 館内においてしかるべきスペースを確保し、閲覧のための座席を5~10席増設する。